

## 保健体育科研究部会（小）

**I 研究テーマ** 全体テーマ「生きる力を育てる体育学習をめざして」

### II 研究テーマ設定の理由

体育学習において「生きる力を育てること」に積極的に関わっていきたいと考えている。生きる力を育てるということは、何よりも「学校や授業が楽しい・おもしろい」という経験を数多く積み重ねながら、子どもたちが生き生きと活動に取り組むことができるようにし、その中で自ら考え行動する力を培っていくことにある。

体育学習において「生きる力を育てる」には、単に体力づくりや運動技能の習得を目指すだけでなく、運動を愛好し、運動への自主的な取り組みのできる力を身につけさせることが大切である。そのためには、児童の能力・興味関心・欲求などを把握し、一人一人が楽しいと感じるような授業を実践していくことが重要になってくる。このような視点で取り組むことによって、自ら運動をする意欲を培い、生涯にわたって積極的に運動に親しむ資質や能力が育成されていくものとする。

しかし、近年、子どもたちの体力の低下が話題となり、活発に運動する子どもとそうでない子どもたちに二極化していると言われている。そんな中、学校体育における「楽しさ」とは、精一杯体を動かす楽しさ、仲間と協力する楽しさ、汗を流す喜びのほかに、「自分のめあてをもち、その達成にむけて創意・工夫・努力していく楽しさ」も重要な要素の一つである。そこで児童の心身の発達の状況や運動に対する興味や関心の状況を考慮した上で、①一人一人の能力に応じた適切な課題を選択、②適切な支援や評価、③教材・教具や場の工夫をしながらその課題を解決していく過程を大切にするといったことを念頭に置きながら運動の楽しさを味わわせていきたいと考える。また、多くの楽しさを経験させていくことにより、自ら考えたり、自ら行動したりする力を培っていくことができると考える。

以上のようなことから本テーマを設定し、生きる力を育てる授業づくりをすすめていくことにした。

### III 研究の経過と内容

- 4月11日 部会総会（役員選出・研究日程・研究テーマの決定）
- 5月14日 第48次春季全体集会 部会研究会(全体) 基調提案・運営方針決定
- 6月18日 部会研究会（ブロック毎）
- 7月31日 部会研究会（ブロック毎） 第48次夏季全体集会
- 8月16日 部会研究会（ブロック毎）
- 9月 3日 部会研究会 C(陸上運動)ブロック研究授業（2013年度県教研代表授業）
- 10月 1日 部会研究会（ブロック毎）
- 11月 5日 部会研究会 A(体づくり運動)・B(表現運動)ブロック研究授業
- 1月21日 部会総会 各ブロックの成果の発表と反省・来年度の方向性  
県教研の還流報告

#### IV 各ブロックの研究内容

##### 1 Aブロック（体づくり運動・器械運動部会）

###### （1）研究テーマ 『自ら取り組む楽しい体育学習』

「あおぎりプレイランドであそぼう！！」（体づくり運動）

###### （2）研究の内容

本ブロックでは4年間、体づくり運動についての実践を重ねてきている。平成22年度の1年生の実践では、動きの「習得」に重きを置き、実践を行った。みんなで同じ動きを経験し習得する。そこから友だちの動きを見合う中でそれぞれの動きを工夫させる学習をしてきた。一昨年度の4年生の実践では、子どもたちがより主体的に活動する「活用」という部分に重点を置き平均台を使った「渡る」運動に着目し授業づくりをした。様々な道具を使い、より楽しい場をグループでつくり上げる活動を通して、中学年における体づくり運動の授業のあり方について考えてきた。昨年度は5年生の体づくり運動の実践を行った。新体力テストの結果を見ながら、高学年の児童が、自分の体力を高めるためにどのような運動を選び、挑戦していくのかを考えていく中で、高学年における体づくり運動について考えてきた。「体づくり運動」について、一人ひとりが実践したレポートを持ちより、その指導内容や方法についての情報を共有することも並行して行った。

今年度、ブロックのテーマを『自ら取り組む楽しい体育学習』とし、1年生での「体づくり運動」を取り上げることにした。一つひとつ実践を積み重ねていくことにより、「体づくり運動」の指導法について考える機会としたり、自ら取り組む楽しい体育学習による子どもたちの変容を追求したりしようとした。

今年度は、授業者の意向で「ボール」「輪」「平均台」「バランスクッション」を取り入れた単元をすることにした。23名のAブロックのメンバーがそれぞれの用具を経験し、1年生の発達段階にあった課題を作成しその課題について検討を重ねた。その課題が子どもたにあったものであるのかについてもふり返るようにした。

###### （3）成果と課題

- ・「ボール」「輪」「平均台」「バランスクッション」を使い、それぞれ5つずつ運動のバリエーションを考えた。その中にはペアでの運動も取り入れたので、お互いを意識しながら上手に運動しようとする場面が多くあった。子どもたちはそれぞれの運動に意欲的に取り組みながらその運動の「ポイント・コツ」を見つけ、動きもよいものになっていった。
- ・グループ内で「うまいね」「ナイス」といった励ましの声かけがあった。また、ペアでの運動で「もっとこうして欲しい」といった、うまく運動するために打ち合わせをする場面は多く見られた。今回「みつけタイム」の時間を取り、友だちの動きに注目させるようにしたが、低学年の授業における、運動量の確保と思考場面のバランスについて今後も考えていきたい。
- ・単元を通し、タブレットpcを大型テレビに接続し、よい動きを子どもたちに示すことを行ってきた。よい動きをイメージしたり、自分の動きを確認するという面で大変効果的であった。

## 2 Bブロック（ボール運動・表現運動部会）

### （1） 研究テーマ 「自ら取り組む楽しい体育授業」

～「大変だわールド！」（5年 表現運動）をとおして～

### （2） 研究の内容

昨年度までのゴール型ボール運動の研究によって、中学年（ゲーム）および高学年（ボール運動）に共通する指導のポイントを確認することができた。低学年（ボール投げゲーム、ボールけりゲーム）の授業実践は行われていないが、指導者が児童に身に付けさせたい技能を明確にもち、動きのポイントを指導していくことや、子どもが夢中になって運動するドリルゲームを設定していくことで、低学年の児童も技能の向上が期待できることがわかった。また、ゲームの場やルールを工夫することによって、動きの工夫に目が向くことも期待できる。このように、2年間の研究によって小学校低・中学年の「ゲーム」から高学年の「ボール運動」へのつながりについて共通の理解が得られ、一定の成果をあげることができた。

そこで今年度は、これまでの研究メインテーマを継承しながら、2年間の成果を他領域の授業づくりに生かし、次の点を中心に研究を重ね、表現運動領域（5年生）の授業実践を行った。

- ①児童が夢中になって取り組み、表現の工夫が生まれやすい題材について
- ②動きのポイントについての指導方法（動きの提示方法、声かけ、具体物）について
- ③友だち同士の関わりが生まれる場面の仕組み方について
- ④効果的な指導計画について

### （3） 研究の成果と課題

- 「大変だわールド！」で提示された動きの題材が、児童にとって動きをイメージしやすいものであり、カードに書かれたオノマトペ（擬音語・擬声語・擬態語）も効果的だった。
- 身に付けさせたい技能を指導者が明確にもち、指導計画で1時間ごとの指導重点を設定したことで、本時の場合は「空間」を意識した動きが児童の表現の中にしっかりと現れていた。
- 事前の児童の実態の中では、表現運動に対して恥ずかしいと考えていた児童がいたはずだが、本時の授業では友だち同士でアドバイスをしあいながら表現を楽しんでいる児童ばかりであった。計画的な指導が有効であったことと、教師の動きを伴った具体的な指導や、オノマトペを効果的に使った助言が表現運動を楽しむことにつながっているのではないかと考えられる。
- 表現運動は、指導者の授業の雰囲気づくりや指導によって児童の運動への積極性に違いがある。指導計画や題材の選定、教材については今回の実践を今後の指導に生かせるが、指導者の児童への声かけや動きを伴った指導については、今回の成果を各々が自分の指導のスタイルにどのように取り入れてこれまでの指導を改善していくか考えていく必要がある。

### 3 Cブロック（陸上運動・水泳部会）

#### (1) 研究テーマ「自ら取り組む楽しい体育学習」

～遠くまでジャンプ（走・跳の運動 幅跳び）～

#### (2) 研究の内容

Cブロックでは、この3年間、陸上運動の中の、「跳」の運動に焦点を絞り、研究を進めてきた。初年度は2年生の跳の運動遊び、2年目は4年生の高跳び運動を取り上げた。今年度は、2年間の研究で明らかになった、「子どもの実態に合った場の設定の重要性」、  
「『場』でどのような力をつけるのか児童に意識させることの有効性」、「練習成果を確かめることや伝え合うことの有効性」などの研究成果を踏まえ、中学年での幅跳び運動を中心に授業作りを行った。高学年へのつながりを視野に入れながら、場の設定や教師の声かけ、学び合いに重点を置いた指導案作りに努め、国母小学校に授業を提供していただき、検証を行った。

#### (3) 研究の成果と課題

- 3つの場を設けて運動することにより、一人一人の課題に適した運動ができ、技術の定着を図ることができ、多くの児童に記録の伸びが見られた。
- 3種類の補助運動に取り組んだことで、徐々に動きがスムーズになった。幅跳びへのステップとして有効であった。特に手の使い方は、高学年につながる動きであり、中学年としておさえておくことは大切である。
- 3つの場で児童は意欲的に運動に取り組み、教師のアドバイスや指導をよく聞き、よい雰囲気の中、活動する様子が見られた。3年生という発達段階や次へのつながりを考え、着地や助走距離、高さに対する指導の工夫が必要である。
- 中学年の段階では、様々な感覚を養うため、跳ぶ、超える、またぐなどの非日常的体験をさせることが必要である。
- 交代でアドバイスをしたり、声かけをしたりする姿が見られたが、3年生にとっては、やや難しい課題であったため、班によっては学び合いまで高まることはできなかった。児童の意識づけのために、全体で見合う場面の設定や、グループの構成等に課題が残った。
- DVDやiPADなどを使って、画像でイメージを伝えたり、身近なものを利用して跳ぶ動きを教える等、さらに工夫していく必要がある。